

【研究発表2】 第9席

「『甲乙經』における穴の主治證の研究」

東京 篠原孝市

古来、鍼灸書とは多く〈經穴書〉である。言うまでもなく、そこでは概ね、まず穴の部位が述べられ、ついで刺灸法、經脈の交会等の情報が付加され、最後に主治證がおかれる。しかし、穴の部位表現こそ經穴書の眼目であるとの考えにより、専ら部位の記述のみが問題とされ、刺灸法はもちろんのこと、特に大きな部分を占めている穴の主治證についても等閑視される傾向にある。現在の經穴学では、これらの問題に殆ど触れない。特に近年の日本では、主治證を〈経験の集積〉の一言で片付け、それを機械的に引用することはあっても、まともな考証の対象としていない。経験のもつ意味、経験と證の記述の間にある過程、記述の構造等が原資料に即しつつ問われるというようなことは一切ない。そのため主治證がそのまま臨床に問題になることは少ない。一方、現代中医学では穴の効能を〈穴性〉として提示しているが、その出自、根拠、表現に曖昧な点がある。

そこで本論では、穴の主治證研究の最初の試みとして、伝承資料としては中国最古の鍼灸専門書である『甲乙經』の卷之七以降に集中的に見られる穴の主治證条文の検討を行い、その構造、性格の一端を明らかにする。